

羅森来日の契機について

陶 徳民

ここ数年、「東洋比較文化論」の授業で近世近代東アジアの重要な旅行記四点をとりあげて学生諸君と一緒に日・中・朝間の相互認識を検討しているが、その中の一点は羅森の『日本日記』である。

羅森は広東南海の人で、字は向喬、1854（嘉永7）年前半、再び来日のペリー提督に随行し、通訳や書記の仕事をしなが、下田や箱館で「同文」の日本人に求められ、千五百枚以上の扇子に詩文と題字を残した。その時に書かれた『日本日記』は一清国人による日本開国事情の証言として高い史料価値を有するものである。早くも同年の11月から、『遐邇貫珍』というモリソン教育会出版・英華書院印刷の香港の中文月刊に3回にわたって連載され、幕末明治の日本人の目に留まった。1913（大正2）年に『大日本古文書』幕末外国関係文書が編纂された際、付録の一つとして「米国外使節随行清国人羅森日本日記」というタイトルで収録されている。中国での出版はむしろ最近のことであり、改革開放のムードを象徴する『走向世界叢書』のなかの日本関係の1冊に収録されたのは1985年であった。

これまで羅森の『日本日記』に関する研究は少なく、管見の限りでは北京大学王曉秋教授の「近代中日文化交流的先駆者羅森」がもっとも詳しいもの（同『近代中日関係史研究』所収、中国社会科学出版社、1997年。ちなみに、筆者の所持本はさる9月2日、北京大学で王教授を訪ねた際に恵贈されたもの）である。

しかし、羅森という人物についてはなお謎が残っており、ペリーに随行するまでの身分はいまだに不明のままである。したがって、今回、羅森を雇い入れたペリーの首席通訳官であった衛三畏(Samuel Wells Williams)の航海日記(A Journal of the Perry Expedition to Japan 1853-1854)によって探ってみた。以下は初歩的「発見」の報告である。

衛三畏(1813-1884)は、宣教師出身の米国外交官である。最初は、広州で米国キリスト教公理会の印刷所を経営する傍ら、ブリッジマンのChinese Repositoryの編集を手伝った。1837年日本人漂流民を送還しようとする米船「モリソン号」

（「蛮社の獄」のきっかけをなした「モリソン号事件」に関連する船）に同行し、1853-1854年ペリー提督の中国語担当通訳官を務めた。その後、20年にわたって清国駐在米国公使館一等参事官兼通訳として活躍し、晩年はエール大学の漢文教授を勤めた。著書に、The Middle Kingdom, A Syllabic Dictionary of the Chinese Language などがある。

衛三畏による羅森雇用の理由は実は、先にも触れた日中間の「同文」という事情とも係わっていたようだ。米国側には日本語のできる通訳がおらず、日本側には英語のできる通訳がいなかったため、首脳間の親書や和親条約などの外交文書の翻訳、そして日本側首席交渉委員の林大学頭などとの筆談をまじえた会談などで、漢語はオランダ語とともに当時の日米交渉に欠かせない仲介言語の1つであった。これに加えて、漢語に堪能な衛三畏本人はなかなかの勉強家で、航海途中でも中国人を相手とする語学研鑽を怠っていなかった。このような2つの事情から中国人雇用の必要性が生まれたが、しかし、1853年ペリーの1回目の来航に随行した衛三畏の雇った中国人助手は、人柄はいいが、教養があまり高くなかったようである。それに、お互いの発音（訛り）の違いが意思疎通の障害を増幅させてしまったようである。同年6月30日の日記に次のように書かれている。

I have been busy translating the President's letter, and find my Chinese assistant a mere copyist, one who has had but a little reading and is not quick at catching my meaning. Added to this, his pronunciation differs from mine considerably, so that we are thrown off from catching the meaning. He is good-natured and patient, in which qualities I can learn.

このような失敗を経て、衛三畏は中国人助手の選択に慎重な姿勢で臨むようになった。結果として、羅森が新たに雇われ、1854年再度来航直前の1月11日の日記に、羅森を確保できた衛三畏の喜びが明らかに表れている。

I have secured the assistance of Lo, a teacher of good attainments and no opium smoker, so I hope to do more study than I did before.

これによれば、来日前の羅森は文化的教養の高い教師であったことがわかる。しかし、どこ（香港か広州か南海か）でどのような教育に携わっていたかは依然として不明だが、今後の追跡課題にする。 (2000.9.10)